2012 年（平成 24 年）9 月 15 日発行

きぼうのいえ ニュースレター

2012年 秋号

特定非営利活動法人 きぼうのいえ
〒111－0022 東京都台東区清川 2 丁目 29 番 12 号
電話：03-3875-7523　Fax：03-3875-7525
E-Mail：kibounoie777@mbm.nifty.com
ホームページ：http://www.kibounoie.info

そぞろ思うこと

施設長　山本雅基

きぼうのいえもこの 10 月 1 日で、開設からまる 10 周年を迎える。その年月はいろんな風雪あり、笑いありの 10 年であったが、私たちが確実に成長してきたことは間違いない。その育成の多くは入居者の方から学んだものである。

60 代後半の K さんは雑工さんとして、山谷でなんでも屋の一人として働いていた。最初は、厳しい口うるさいところのある人だったが、ある日、きぼうのいえの礼拝堂に行ったことから彼の人生は激変をはじめた。何ものかが、彼の肩をポンと叩いたという。「それって、神さまか仏様が触れたっていうこと？」僕の質問に彼は関西訛りでこう答えた。「それがー、そのなんていうんでしょうか、われわれより高次の意識体が私に触れましてな、『おまえのいのちは大丈夫や』そういうメッセージいうか、ことばでないことばで話しかけてきたんですわ」「それって K さんの病気が治るっていうこと？」「いやいや、そういうことではありゃしませんのです。『お前はおそらくこの病気で死ぬであろう、でも、おまえのいのちは大丈夫や』と、そんなこと、いいますんねん」僕は、K さんが大きな存在から人間のいのちについてのメッセージをもらったと感じた。

それから、かれの様々な学びがはじまった。朝、昼、夕にはきちんと挨拶をする。また驚いたのは、かれが教養を求めるかたまりになったことだ。「いやー、若い頃は時間をもてあまして、酒ばっかり飲んでいましたが、今は読書や DVD を観るのに忙しくって…。1 日が 26 時間、27 時間ありゃせんかと思う毎日です。ところで、山本さん、立花隆さんに『臨死体験』という本がありますね。あれ貸しちゃくれませんか」万事がこんな風情だった。

そして、旅立つ前日、かれは言った。「私は喜んで前に向かって死んでいきます！」と。普通は喜びと死とはベクトルが逆になってもいいようなものだが、K さんにとって死＝よろこびだったのだろう。そして、辞世の句が「ああ、死ぬのが楽しみです！」であった。

古代のエジプトの「死者の書」にこんな言葉がある。「肉が死によってその眼を閉じるとき、魂の眼は開かれて、明るい光を見る」と。われわれは、もっと霊的、スピリチュアルな感性を磨く必要がありそうである。「われわれは霊的経験をする肉体的存在なのではなく、肉体的経験をする霊的存在なのである」いにしえの言い伝えを改めて心に刻むときではなかろうか。

きぼうのいえでは私どもの活動にご賛同頂ける皆様方にご支援・ご寄付をお願いしています。
振り込み方法は ①郵便振替、②銀行振込み、③インターネット募金 の3つがあります。
ご協力頂けますよう、お願い申し上げます。

① 郵便振替の場合	② 銀行振込の場合 (※1)	③ インターネット募金
郵便振替番号:	みずほ銀行 三ノ輪支店 普通	ホームページからアクセスして、
00190－6－388670	口座番号: 1284037	カード決済することもできます。
名義: きぼうのいえ後援会	名義: 特定非営利活動法人きぼうのいえ	http://www.kibounoie.info/index.html

※ 1 銀行振込の方で領収書が必要な方はメール等で連絡先をお知らせ下さい。
正会員希望の方は、お手数ですが事務局までご一報下さい。

春 —桜の匂いだけを嗅ぎに･･･

春は近くの玉姫神社まで散歩がてら花見に行きました。数回にわけ、希望者だけを募った、ずいぶんこじんまりとした一行でした。この日、眼のみえないＹさんはＳさんが押してきたバギーに腰をかけ、桜の匂いだけを嗅ぎました。

帰りは少し遠回りして近所の名物桜を見ようと思ったのですが、場所がよくわからず迷っていると、やはり眼のみえないＭさんがしきりに左前方を指さすのでそちらのほうへ。しかし結局目標物は見つからず、ただの散歩大会になってしまいました。

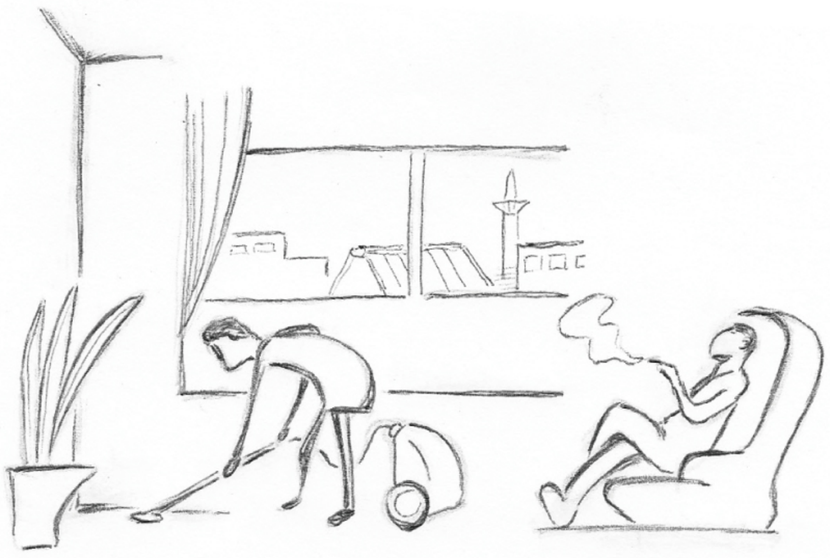
Ｓさんは、ボランティアのＮさんにつきそわれて、バギーを押しながらさらに隅田川沿いを下っていきました。やはり、この季節は桜を堪能せずにはいられないようです。

こんなひとがはたらいています

「掃除のＨさん」

「掃除のＨさん」はシルバー人材派遣センターで紹介されたビル管理会社から派遣され、きぼうのいえにきている。月曜から土曜までの午前中、廊下やトイレや談話室など、おもに公共スペースを掃除してくださっている。出勤回数はスタッフよりも多い。また、ここで働くようになって九年、その長さは一番古株のスタッフより一年短いだけ。ある意味でＨさんは、きぼうのいえをごく近くから定点観測してきた存在である。

最初は山谷という地域について何も知らず、漠然と「怖いなぁ」くらいにしか思っていなかったという。この施設がホスピスということも知らされていなかった。しかし、そんなふうに戸惑っていたら、入居者のＳさんから「山谷には暗黙の了解があって、女と子どもには悪いことしないことになっているから安心しな」と言われたとか。また、入居者さんの死については個室まで入り込むことがないので直接は目にしないものの、談話室で顔を見なくなると「最近調子悪いのかなぁ」と案じたりしている。Ｈさんは、そうやって「慣れました」と淡々と話してくれた。



いちばん印象的だった入居者さんはと聞くと、「なかよしハウスのＭさんかなぁ」。Ｍさんはとにかく物知りで、たしかに掃除中のＨさんとしゃべっている光景はよく見かけた。つい最近はＹさんのお見舞いにもスタッフと連れだって行ってきた。誰かが亡くなって玄関で出棺の式をするときには、スタッフらと一緒に花を捧げてくれたりもする。最初は掃除機の音が邪魔になるから仕事の手を休めるだけだったのが、だんだん距離が縮まって、あたりまえのように花を捧げるようになった。「最期は幸せだったねぇ」と言うと、スタッフの誰かが「最初はたいへんだったんだから」と苦笑まじりに言ったりする。Ｈさんは、そういう話の聞き役にもなっている。

からだが続く限りこれからも同じことをやっていきますという話だったので、ふらっと遊びに行ったらきっとＨさんが掃除機をかけているにちがいない。

Ｋ君のこと

Ｋ君は40代で、わたしと同い年だった。彼はとてもユニークで、どうユニークかは下手に書くと失礼になりそうだからやめておくが、ただ真夜中、わたしは彼を、寝ているひとを起こす勢いで怒ったことがあった（むろん後日謝った）。それから病状が進行するにつれ、奇妙なほどに打ち解けた。

彼が立てなくなったあと部屋で話すようになったが、話したのは、「落ち込んでいる」「そうなんだ」と同じことの繰り返しだった。同じ相槌を打つにも声色には気を遣った。それくらいしかできることはなかった。ある日は部屋を出る際「頑張れ」と言い、すぐに取り消した。「ごめん、他に言葉が思い浮かばなくって」―多分、気持ちは通じた気がする。というより、言葉尻に構っている余裕はＫ君にはなかった。

深夜にご遺体の顔を見に行って彼の好きな曲を３回かけた。その死に顔を憶えておこうと思った。

戦争の話

【敬礼】

春に新しく入居されたＡさんは海軍の出身だそうです。その話が出るとＡさんはキリっと敬礼する姿をみせてくれました。脇をしめた海軍スタイルで、ボランティアのＷさんによれば「海軍は甲板が狭いから腕をタテにするのよね」とのこと。

「そういえばＢさんはもっと腕が開いてたよね」―入居した時点ですでに認知症がすすんでいたＢさんからは詳しい話を聞けませんでしたが、「わたしたちはＢさんのことを元警察官とばかり思っていたけれど、あれは警察のスタイルというよりも陸軍式だったのかもね、そういえば満州に行ってたという話もあるし…」と、私たちは故Ｂさんの往時を偲んだのでした。

【南方戦線】

入居者のＣさんは今は寝たきりで、ときおり発熱し、そのつど驚異的な体力で回復しています。それをみると、みな口々に「流石に戦争に行ったひとは違う」と言います。Ｃさんは南方へ出征したそうで、足の指が欠けているのはそこで地雷を踏んだせいだという噂を聞いたことがありました。そこで本人に尋ねたところ、「そんなことをしたら死んでしまうじゃないか」と怒られてしまいました。

その後の夜、訪室して「テレビ、消していいですか？」と聞いたら「大事な問題じゃ」―そこに映っていたのはNHKドキュメンタリーの民族紛争特集でした。認知症がすすみ、かなりいろんなことがわからなくなっていても、彼のなかでは大事な何かがまだまだ元気に生きているようでした。

【学徒動員】

北海道出身の故Ｄさんは学徒動員で東京に出てきました。そこで後方支援の女工さんたちと一緒に仕事をし、最年少だったからずいぶん可愛がられたと話してくれました。その後、鹿児島に転属となって、そこでもやはり最年少だったから可愛がられたそうです。Ｄさんが目を細めてそう話すとき、それは深刻な戦争体験というよりもまるで青春譚のようです。

終戦後、仕事で東京へ行ったときにはお世話になった元女工さんたちのところへご挨拶に行ったそうです。Ｄさんの人柄がよくわかる話と思いました。

【原爆】

故Ｆさんは軍艦でコックの仕事をしていたそうで、入居したての頃、船がひっくり返った話などを楽しげに語ってくれました。船は広島の軍港をたち、関門海峡をまわって日本海へ―そのとき遠くに閃光をみたといいます。「原爆だね、あそこで一日遅れていたら死んでいたんだね」と、Ｆさんは不思議な面持ちで話してくれました。

べつの日、「そういえばＧさんは長崎でしたよね…」と原爆について尋ねたら、静かな強い口調で「あたりまえじゃないか」と言われました。ご本人ではなかったけれど、お兄さんが被爆をし、その後長らく後遺症に苦しんできたのを自分は近くでみてきたと、やや辛そうに話してくれました。

【戦争観】

ある日、談話室で故Ｈさんと話していたら、戦争が話題になりました。テレビのニュースで外国の戦争のことが流れていたからです。身内を失くした悲しさ、空襲のなかを逃げる怖さ、それから焼け跡の虚しさなどについてＨさんは語り、横にいたＩさんはまだ若くて戦争を経験してはいなかったけれど、よく話を聞き頷いていました。

そこにＪさん登場―若いＪさんは「戦争はケンカとおんなじ」と演説し、タバコを吸い終わるとさっさと行ってしまいました。残されたＨさんたちはそれからしばらく沈黙し、ついに話題は元へはもどりませんでした。

◇

語るひとによってさまざまな陰影があって、そこに「そのひとらしさ」が感じられます。戦争をつうじて入居者さんの理解が深まり、入居者さんをつうじて戦争の理解が深まるといった感じでしょうか。

なお、空襲で山谷地区のどのへんが焼けたかについてはみなさんご記憶が曖昧なようです。

日々、戦争の話ばかりしているわけではありません。わざわざ聞いてまわったわけでもありません。でも、そういう年齢の方々と接しているので、ふとしたことから戦争の話題になることも少なくありません。今回は、そうしたなかからいくつかをピックアップしてみました。(S)

法人名： 特定非営利活動法人 きぼうのいえ

活動計算書

平成23年 4月 1日 ～ 平成24年 3月 31日 まで

（単位：円）

科目	金額		
Ⅰ 経常収益			
1．受取会費			
個人会員受取会費	492,000		
法人会員受取会費	50,000		
月約会員受取会費	618,000	1,160,000	
2．受取寄付金			
一般受取寄付金	17,957,940		
教会受取寄付金	1,752,021	19,709,961	
3．受取助成金等			
受取地方公共団体補助金	4,700,000	4,700,000	
4．事業収益			
事業収益	44,997,984	44,997,984	
5．その他収益			
受取利息	231,623		
雑収益	5,373,765	5,605,388	
経常収益計			76,173,333
Ⅱ 経常費用			
1．事業費			
(1)人件費			
給料手当	24,594,150		
臨時雇賃金	5,370,200		
法定福利費	3,682,078		
福利厚生費	46,342		
人件費計	33,692,770		
(2)その他経費			
図書仕入れ	118,809		
旅費交通費	1,318,417		
通信運搬費	478,767		
消耗什器備品費	486,885		
消耗品費	196,352		
修繕費	1,444,270		
印刷製本費	270,427		
図書資料費	9,390		
光熱水料費	3,780,406		
賃借料	7,196,490		
保険料	221,770		
諸謝金	26,000		
租税公課	485,100		
委託作業費	2,945,830		
厨房費	12,660,375		
支払利息	1,230,625		
支払手数料	186,085		
減価償却費	3,598,589		
雑費	121,805		
その他経費計	36,776,392		
事業費計		70,469,162	
2．管理費			
(1)人件費			
給料手当	3,600,000		
人件費計	3,600,000		
(2)その他経費			
旅費交通費	234,120		
接待交際費	40,675		
会議費	3,000		
支払手数料	853,410		
雑費	9,150		
その他経費計	1,140,355		
管理費計		4,740,355	
経常費用計			75,209,517
税引前当期正味財産増減額			963,816
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			893,816
前期繰越正味財産額			77,353,749
次期繰越正味財産額			78,247,565